

## 2011 年夏休み友情のレポーター フランス／岩手取材レポート

佐々 美波（岩手県／当時 13 歳）

<フランスでの旅について>

フランスに行って、初日はキャンプでした。

フランスの NGO スクール・ポピュレール・フランセ（市民の絆フランス）がかいさいしている子どもキャンプです。22 ヶ国の人があつまっていました。日本からも福島から 2 人来ていました。キャンプ場では、よなかまでみんなで歌をうたったりして、みんなとっても楽しそうだったし、言葉が通じてないのに、笑いあっている人を見て、とってもビックリしました。

2 日目も、キャンプで 5000 人があつまる海に行きました。人がいっぱいです。スリランカの人といっしょにサッカーをしました。ぜんぜんボールをけれなかったけど、スリランカの人ボールをまわしてくれてうれしかったです。夜にスリランカの子にテントに行って、日本のあそびのおてたまや、つるのおりかたをおしえながらあそびました。

3 日目に、キャンプでいろいろな国の人にインタビューをしてきました。はじめは緊張して、いきなりカメラを向けてしまっておどろかれたり、なかなか自分から話しかけれなかったけど、最後の方は自分からインタビューできるようになってよかったです。地図をもって行って「あなたの国はどこへんですか？」と聞いたら、地図を指さす位置がみんなちがってびっくりしました。

その後、あしたキャンプがさいしゅう日なので、おわかれかいをしました。

4 日目もキャンプでした。けど、今日おわかれなのでかなしいです。朝はやくおきて、スリランカの子と福島からきた人に岩手の現状をはっぴょうしてきました。スリランカも、つなみなどが多いということをはじめてしりました。そのあと、みんなとおわかれかいをして、今日とまらせてもらうお家に行きました。

5 日目は、エクサンプロヴァンスに行って、仏日協会の人たちに、かんげいかいをしてもらいました。日本の人がいっぱいいて、とっもしんぱいしていました。仏日協会の人たちは、ぼきんかつどうなどもしてくださっているみたいで、とっもうれしいです。その日は仏日協会の人のお家にとまらせていただき、おないどしの子 2 人といっしょにねました。町のしょうかいなどもしてもらったのしかったです。

6日目は、釜石のしまいとしのディーニュ・レ・バン市の市長さんにひょうけいほうもんをしました。岩手のげんじょうをはなしたら、「大変だったね。これからは、いっしょに頑張ろう。」とってくれて、心強かったです。お昼は、フランスのとしのちかい子たちとたべて、つるをいっしょにおったり、ラベンダーまつりをけんがくしました。会場で、そのむらのでんとうである、ラベンダーのかおりぶくろをつくりました。なんとにおいが100年ももつみたいです。夜は、おしょくじ会をひらいてもらって、としのちかい人たちみんなで、テニスをしました。とつてもたのしかったです。

7日目は、ロクシタンの工場けんがくをして、マルセイユ日本りょうじさんや、ロクシタンの人たちに、岩手のげんじょうをはなしてきました。工場では、人の手でシールをはったり、とにかくたくさんの製品が生産されていました。シールもいろいろなしゅるいがあってびっくりしました。工場にあるお店にもよって、ほしい物をかごに入れていいよ。といわれて、いっぱいもらいました。どれもいいかおりのものばかりで、全部でたぶん10しゅるいくらいはあったと思います。岩手のげんじょうを話したとき、話しながら釜石の記録という本をまわして見せました。みんなその本をみて、おどろいていて、とても心配していました。でも、今がんばっているよ。と伝えたら、みんな「がんばろうね」といってくれてうれしかったです。

8日目のフランス最しゅう日は、パリかんこうをしました。

私はこの8日かんの間に何度か岩手のげんじょうをはっぴょうしてきました。予そう以上にみんなしんぱいしてくれていて、ビックリしたし、行く前みんながどれほど日本をしんぱいしているかわかんなかったし、自分たちだけ大変だとか思ってたけど、行ったあとは、みんながしえんしてくれてるのがわかったし、行くまえまでは、わかんなかったけど、どれほど自分たちがつなみにあまえていたかわかったので、これからはもっともついろいろな人に岩手のげんじょうをはっしんさせていったり、岩手のいいところをはっしんしていきたいです。もとの岩手みたいにかっせいかしていきたいです。

<帰国後の取材について> =報告会の原稿

3月11日、私は学校にいました。今から部活というときに、大きなゆれが私たちをおそいました。私がかよっている学校はとても海に近いのでひなんくんれんをたくさんおこなっていたため、すぐに、机の下にかくれ、ゆれがおさまったと同時にてんでんばらばらにございしょの里までひなんしました。だけど、けっして高いところではなく、3年生のせんぱいが「ここじゃきけんです。」と先生に言って、もっと高いと

ころへ小学生の手をひっぱってにげました。やっとみんなが高いところへついたらとうじにとっても大きななみがやってきました。高いところから見えるわたしの家やがっこうを、はいいろいつなみがすべてのみこんでいました。ただただおどろきでした。今、学校はなくなって、大きなこうていがしまんだった学校のこうていには、いっぱいのがれき…。なので、いまはちがう学校をかりて勉強しています。やっと、部活も出来ています。12月にはかせつこうしゃが出来るとなりたいです。

私たちはつなみにあったこんなときだからこそ、みんなで一つになってがんばるべきだと思います。私は、今、私に出来るささいなことでも、やっていきたいと思っています。よりよい岩手、釜石にするために頑張っていきましょう。

そのためには、釜石のいいところをみつけて発信していきたいです。なので、私は釜石大観音にしゅざいに行ってきました。とっても大きくて、大観音のなかにはいれるようになっていて、12かいまであるんです。けど、じしんのえいきょうで3かいまでしかいけません。でも、今年中にはなおすみたいでうれしいです。大観音は、海をみているかみさまでもあるし、前にあったつなみでなくなったかたのおまいりをするところでもあったみたいです。そんなときから大観音は私たちをみまもってくれています。

私は釜石のいいところ、場所は大観音だと思います。なので、これからも発信していきたいです。

2011年 夏休み友情のレポーター 佐々 美波

## 2011 年夏休み友情のレポーター フランス／岩手取材レポート

### 休石 慧衣（岩手県／当時 15 歳）

#### <フランスでの旅について>

私は、友情のレポーターとして8月23日から8月31日の9日間、釜石東中学校の佐々美波ちゃんと一緒にフランスに行き、岩手の現状を伝えてきました。海外へ行くのは、初めてだったのでとても楽しみでした。

1日目から3日目は、フランスのNGO スクール・ポピュレール・フランセ（市民の絆フランス）が開催している子どもキャンプに参加しました。世界中の22の国と地域から140人くらいの子供が参加していました。私たちはキャンプの途中から参加したので、みんなと仲良くなれるか心配でした。日帰りでも海に遠足に行ったり、キャンプ場でみんなで歌ったりしながら過ごしました。

この3日間で一番仲良くなったのはスリランカから来た人たちです。遠足に行ったときに仲良くなりました。その日の夜は、日本から持ってきた折り紙や紙ふうせんをプレゼントしました。とても喜んでくれたので良かったです。次の日の朝、スリランカの人たちに岩手の現状を写真を使って伝えました。みんな真剣に聞いてくれました。2004年にスマトラ沖の地震でスリランカも津波の被害を受けているので、みんなも私たちと同じようにこわい思いをしていたんだなと思いました。

5日間から7日間は、南フランスの方に行きました。最初はエクサンプロヴァンスに行きました。そこでは、歓迎会を聞いてくれました。歓迎会の中でも、岩手の現状を話しました。写真を見るたびに悲しい顔をする人がたくさんいました。発表が終わったあとも、いっぱい質問をしてくれたり、何か困っていることや必要なものは無い？と、私たちのことを心配していました。

フランスと日本は、とても離れているのにフランスの人たちは、私たちのためにできることはないかと震災直後から考えてくれていたそうです。私は、日本のことをこんなに心配している人たちがたくさんいるんだなと思いました。

6日目は、釜石市と姉妹都市のディーニュ・レ・バン市の市長とお会いして岩手の現状を発表しました。ここでもあなたたちが来るのを楽しみにしていたと、とても歓迎してくれました。フランスの人たちは被災地をテレビでしか見たことがないので、本当に起こっていることと思えなかったと言っていました。その後、原始hの中学生と一緒に昼ご飯を食べました。テーブルに敷いてあった紙で、つるを作って、羽のと

ころにメッセージを書いてプレゼントしました。

7日目は、マノスク市にあるロクシタンの工場見学をしました。工場見学をしたあと、会議室で、岩手の現状を伝えました。この発表が最後の発表でした。自分の言葉で、しっかり伝えられたので良かったです。

私がフランスで出会った人たちはみんな優しくフランスに行く前は、岩手のことを話しても、これからも頑張ってくださいくらいしか正直言われなかったけど、日本のことを本当に心配してくれていて、自分たちができることは、できる限りやるからと言ってくれました。ほかの国もテレビやツイッターなどでたくさん応援してくれています。これからも応援してくれている人と岩手のために自分でできることをたくさんやっっていこうと思います。この想いは大船渡が元通りになるまで変わりません。世界の人たちが東日本大震災のことを忘れないように頑張りたいです。

<帰国後の取材について>

8月23日～8月31日までの9日間、フランスに行って岩手県の現状を伝えてきました。

そして、日本に帰ってきてからは岩手県のことを発信していくということで、私は学校の先生にインタビューをすることにしました。私が先生にインタビューをしようと思った理由は、震災当日、先生たちは学校でどんなことをしていたのか、先生たちの生活はどうなったのか知りたくなったからです。

9月24日、大船渡中学校で先生にインタビューをしました。インタビューした先生は、

私の担任の先生の南幅智介先生です。

1つ目の質問は「3月11日の地震があった時、先生は何をしていたか」です。もうすぐで卒業式という日だったので、先生は体育館で卒業式の準備をしていたそうです。最初は、

よくある地震だと思っていたらどんどんゆれが大きくなって、卒業式練習のために体育館に置いていた吹奏楽部の重い楽器が倒れたので、いつもの地震ではないと感じたそうです。

2つ目の質問は「11日の中で一番大変だったことは何か」です。11日は津波でたくさんのものがこわれて道路が寸断され、家に帰ることのできない生徒がたくさんいました。私も帰ることができず体育館に泊まりました。たくさんの人が泊まって毛布が足りなくなったので、先生たちは近くの家をまわって毛布をもらったそうです。私はこの話を聞くまで、先生たちがこんなことをしていたなんて全然知りませんでした。

3つ目の質問は「電気や水、ガスのない生活をして、どんな時が一番大変だと感じたか」です。先生たちは、震災のあと生徒の安否を確認するためにたくさんの避難所を

まわっていました。電話もつながらず、車で移動しようと思っても道路はがれきだらけで、ガソリンも少なかったので、先生たちは歩いてまわったそうです。これが一番大変だったと言っていました。電話がつながってからは、心配な生徒の家に電話をしていました。自分のことで精一杯だったと思うのに、私たちのことを心配して避難所をまわったりして先生はすごいと思いました。

最後の質問は「震災のあと、先生の中で変わったことはあるか」です。震災のあと余震がとても多く、みんなとてもこわい思いをしていました。先生も、いつもなら何とも思わなかった大きさの地震でも、逃げる準備をするようになったそうです。私も非常用持ち出し袋を自分の部屋に置いたり、地震が起きるとテレビなどで正確な情報を早くとることを心がけるようになりました。

先生の中には、自分が被災しているというのに私たちのことを考えて行動していました。私だったら自分のことだけしか考えられないと思います。

このごろ、テレビや新聞には福島県の原発についての記事が多く、被災地のことについての記事が少なくなっています。日本や世界の人たちに被災地のことを忘れてほしくないです。

11月にある報告会では、岩手が復興に向けてみんなが頑張っているということを、多くの人に伝えられるように発表したいと思います。

2011年 夏休み友情のレポーター 休石 慧衣